

慈

光

百號記念

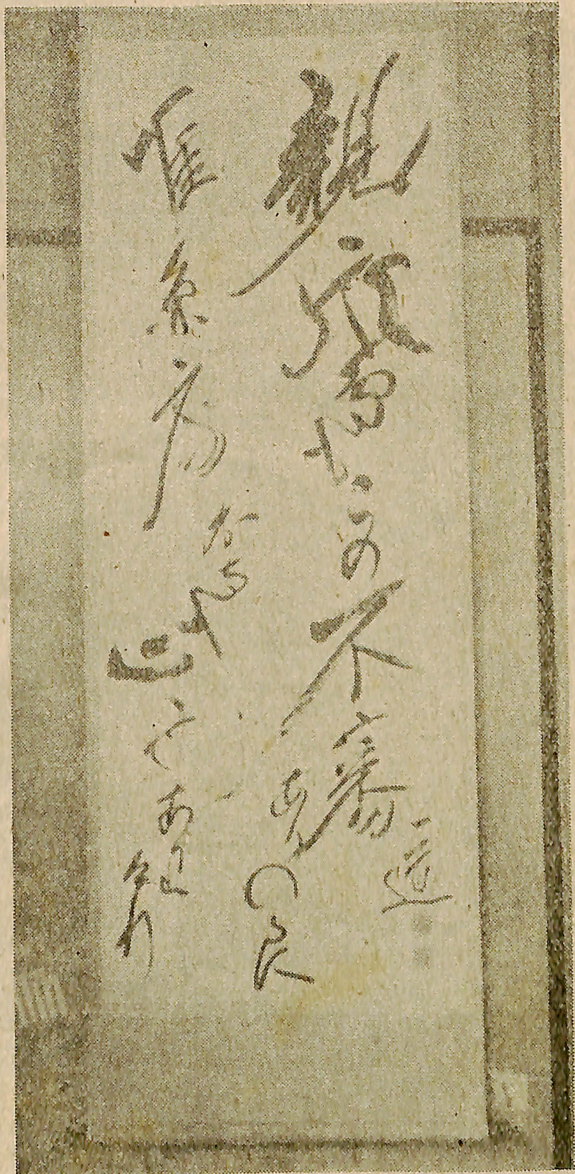
目次

刊行百号に際して……………	花田正夫……………(2)
大経五悪段講話……………	福島政雄……………(6)
白道の旅人……………	柳瀬留治……………(9)
失明を縁として……………	每川敏男……………(13)
可説居士法信抄……………	聚墨生……………(16)

第九卷 第七號

昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可
昭和三十三年七月十五日發行(毎月一回・十五日發行)

(通第一〇〇号)



池山先生の書であります。先生は「無碍一途」「唯仏一途独清閑」を常に渴仰され、御自らも一途と名告つて居られました。福本慶子さんの御蔭で御照会出来ました。同入、引接の聖人の尊容に直面させて頂ける、そしてそれがそのまゝ池山先生の内に、みなぎり、溢れてゐるのを拝するのであります。

聚墨生記

刊行百号に際して

花田正夫

敗戦の憂き目とはかうしたことかと、骨肉に徹して知らされ始めたのが昭和二十年からであります。怒号と不平と不満、自嘲と卑屈と歎息の到るところに渦巻く中を、われひと共に、食を求め、住を探し、衣を尋ねて、右往左往と泳ぎ廻りました。

斯うした中に、私の身心をささへ、いよ／＼これからといふ力を与へられたのが『ただ念仏』の大悲心でありました。それと共に私の心にはつきりと浮び出たのが、十七憲法の太子精神と、歎異抄の悪人救済の本意と、御一代開書の蓮如上人の信仰生活の指標でありました。この三部の聖典を自ら味ひ、有縁の人々と共に語り合ひたいといふ願ひ一つで、私の生活の目標が定まりました。

かうして、東奔西走を続けて居りますと、交通難と食料難と住居難から、聞きたくても聞けない、せめても何か良い信仰書はないかと問はれる人々が多いのでありますが、当時の出版界は紙不足やら販売の都合やらで、さうした真

面目な宗教書は再版の望みがありませんでした。

そこで私の心に深く刻まれてゐるよき人々の教や、出版の六つかしい書物の抄出などにより、併せて先輩有志の方の物心両面の援助をうけて、小冊子出版のはこびになりました。

雑誌の名は、二三の方と相談の結果

△慈光はるかに被らしめ ひかりの到るところには

法喜をうとぞのべたまふ 大安慰を掃命せよ

△観音・勢至もろともに 慈光世界を照曜し

有縁を度してしばらくも 休息あることなかりけり

から『慈光』といたしました。

其頃、近角常首先生を、東京か、御郷里の滋賀県におたづね申して、万般の御慈育を蒙つて居りました。丁度昭和二十五年の春頃でありました。

『君の慈光を出してゐる願はよくわかる。然し君の原稿は片隅にしかない。君が全責任を持つた編集をせよ……』ときびしいお叱りをうけました。そこで編集、発行共に

私が名告り、特別の事情のない限り巻頭に私の原稿を載せ
て、皆様の御叱声を乞ひました。

其後昭和二十六年六月、滿二年余続刊して来ました時、
突然私が冠狀動脈の機能不全による狭心症の発作を起し、
名大に入院一ヶ月の診療の後『まあ無理をしないで、細く
長く』との指示をうけ、静居生活を始めました。

そして一日中太陽の光の射しこまぬ幸楽町の長屋に寝た
り起きたりで、時に聖典を読み、時に来客と談じ、一日一
日を重ねて居りました。

この頃であります。二坪にも足らぬ裏庭の一隅に、ヒヨ
ロ／＼と自然生への糸瓜が一本朽ちた壁板を伝つて延び黄
色い一輪の花を咲かせて居りました。当時はまた食料難で
『花を造るより芋を作れ』式の頃とて、その糸瓜の花の黄
と葉の緑の色がよく調和してじつと見惚れて居りまし
た。すると何処からか一匹の蝶が飛んで来て、花に寄り添
うてしきりに蜜を吸ふのを見ました。その刹那初めて良寛
さんの詩心にふれました。

花無心にして蝶を招き 蝶無心にして花を尋ね
花開くとき、蝶きたり 蝶きたる時、花開く

あゝそうか！と大いにうなづかされました。若し花は開
いても蝶が来なければどうなるであらうか。また蝶は生れ
出ても花の無い里では飢死するばかりであらう。嗚呼しか

ますか』とお慰問下さいました。『へちまの道をひとすじ
に歩むと云つて居ります』とお答へ申すと『さうですか
／＼』とうなづいて下さつた由、力強く嬉しく伝へ聞きま
した。

又不思議にも今は亡き兄達を始めといたしまして、有縁
の皆々様から、陽もあたらぬ、さわがしい家では、万事不
都合だらうと御同情下さつて、現在の所へ土地もお借り出
来て、六畳二間と四畳半の新築の家に十一月に移らせて頂
きました。

めぐまれて ここに宿あり 慈光堂
と誌して転居の通知もすませ、十二月から月三回の日曜
講話を始めました。

又幸なことには、福島先生が当時横須賀に居られ、時々
名古屋を通過されますので、度々御法縁を頂けるやうにな
り、特に神戸大学に転任せられましてから、大経の講話を
ずつと続けて下され、其後御転任やら御転居やら、御子様
の御病氣などの御障り多い中を本年六月まで六年間の続
講、それをそのまま、慈光誌上に飾らせて頂き、法雨を被つ
て参りました。只事ならぬことであります。

さて昭和二十七年にもなりますと、東京、京都の各書店
から種々の宗教書は続々と再版、新刊となり、各地に真面
目な信仰誌も刊行されるやうになりましたので、私の最初

し、一切は寸分のすぎ間もなく、毛髪のへだてもなく、無
心にして招き、無心にして尋ねる。この大調和と大秩序の
世界の瞥見は、私の迎るべき道を不思議にも昭々と照し出
してくれました。

私の道、それは地に落ちた種子からヒヨロ／＼延びた一
本の糸瓜ながら毎日々々精一杯に、糸瓜の花をつける、そ
の一筋道でありました。

生かされて生くばかりなりみ仏の

ふかき誓の あるにまかせて

かう心が定まりますと、不思議にも教知れぬ恵みが我身
の上に注がれてゐるのを仰ぎました。そこで東奔西走する
ことは出来なくても、目がある文字が読める。手があるべ
んが執れる。来客があれば共にみ教を仰ぎ、独りの時は古
聖の心境に浴する。そこに病苦は苦に相違ないが、お念仏
を身に頂く上にはかへつて恵まれた生活に転じてゐるのを
知らされました。

そうした私に、すでに、二年ばかり続刊した慈光誌は、
かけがへのない尊い賜物でありました。行動の自由を奪は
れた私に、四方八方に飛び出してくれる雑誌は、ほんたう
に有難いもの、かけがへのないものと、改めて押し戴きま
した。

其頃、白井成允先生が広島から御郷里の盛岡市にお帰
りの途中、御見舞下さいまして、家妻に『どうして生活され
に発行した時の念願はすでに満足されましたが、今度は病
身不自由の私の唯一の仿かせて頂く場が「慈光誌」となり
ました。

かくて月々發送しながら、次に発見されたのが、言語の
有難さであります。それまでは文章は書く人の所謂「稚小
僧」のやうな走り使ひをする道具、或は代用品位に思つて居
りましたが、お会ひしたくても相互に障りがあつて不可能
である、それも何月かすれば、或は何年かすると可能であ
るといふのであればまだしも、会うて親しく語ることの絶
対に不可能な身には、一通の書信の中に自己の全体を注ぎ
こんで、向ふへとどけることが出来れば『女は人なり』、
切れば血の出る、生命と生命の交流が可能となるのであり
ます。然し私にはそれは出来ないけれど、さう云ふ事を通
じて、南無阿弥陀仏と名告り出て下さる、やむにやまれぬ
仏のまことのいのちの尊さをいよ／＼我が身にひた／＼と
頂くやうになりました。

梵声の悟らしむること深遠なり

微妙にして十方に聞ゆ。

如来の微妙のみこゑ

梵の響十方に聞ゆ。

浄土論。

いのちのこもつたこと、生きた言葉の発見、それは私にとつて大変なよろこびであります。ここに

『還丹の一粒は鉄を變じて金と成す。』

真理の一言は悪業を転じて善業と成す』行巻。

『愛語、よく回天の力あり』 随聞記、道元禪師。

と古聖が仏語を讃仰し、随喜して居られる心絃に触れるのであります。池山栄吉先生が臨終近くなられた日

『何にもなくなる、何んにもなくなる。』

ただお念仏だけが残る。

えらいこつたよ。

有り難いこつたよ。』

と独白せられた信境の一端にも触れるのであります。かやうに慈光を發行して百号、その間私が一番とくをさせて頂いて居ります。

ここに改めて、表に裏に種々に御後援下さつた諸先生を始めとし、御愛読下さる千余の皆様、四方八方、合掌し、私一人への御慈育を謝しまつります。

大経五悪段講話

福島政雄

この五悪段につきまして、私の一通りの感じは簡単に申し上げました通りであります。あと、すこし自由に、申し上げて見たいと思ふのであります。

それは人間といふものは、仲々自分が悪いと思へないといふこの問題であります。それがこの年をとつて参りますといふと段々その感じが二通りになつてくる。と申しますのは今先きに申し上げましたやうに、年とつてくれれば段々鉄面皮になつてくると、若い時にはこれは悪いことと感じたことも、年をとつてくると、当り前のことだと、段々悪いことでも、悪いことと感じないやうになつてくる。これは一つあります、確かにあります。私なんかそれがありません。それから一つ。それはありますけれども、一方では、かう云ふこともあります。年とつて参りますと、段々感じがある面でもまやかになりまして、若い時には余程いい積りで居つたことが、今になつて考へて見るとああ駄目なことであつた、これも悪いことであつた、これも悪いことであつたとかういふ感じが起つて来るといふことも事実であります。

蓮如上人詠

みな人の我とおこらぬ信ぞかし たのむこころも他力なりけり

たのませてたのまれたまふ弥陀なればたのむこころも われとおこらじ

みなひとのまことの信は更になし もの知りかほのふせいばかりぞ

一念のうちにはさだまる往生を となへてのちとおもふはかなさ

一念にむまれゆくべき極楽も おもひしらねばうれしさもなし

わが身ただ罪の深きぞたよりなる 南無阿弥陀仏のちかひたのむに

この二つは矛盾して居りますけれども、両方あるのであります。それぢやから自分のこと考へて見ますといふと私はその面を二つ持つてゐるのぢやないかと思へるのであります。一つの面を被つて、何これ位のこと人間としてあり勝ることだと、極くこの面の皮が厚くなつてゐるかと思ふと、かといふとそれでなくて、若い時にそんなことは罪悪ぢやない、自分に罪は無いと思つてゐたが、今になつて振り返つて見ると、駄目だなあ、といふ、自分といふものが相当深刻な罪を犯してゐる。親に対することでもさうであります。私なんか十や十五の頃、中江藤樹先生のことをしきりに考へて居りましたものであります。

御存じの方もありませんが、私の少年時代に、村井弦斎さんの『近江聖人』といふ小説のやうに書いてある中江藤樹先生の本が出て居ります。それを熱心に読みまして、所々暗記する程に読みました。その書き始めがその

『座敷の障子さらりとひらけて、蓬眉白髪のお翁、半ば顔を出し、藤太郎や、藤太郎やと、庭に遊び居る十一二の少年を呼べり……』

といふのが書き出しでありまして、それから藤樹先生が少年時代、御祖父さんのところへ行つて居られたけれども、お母さんが、近江の郷里の方でアカギレが冬は出来て、痛くて／＼たまらぬといふお手紙が来たのを見て、一心になつて、アカギレの薬のあるところへ行つて、そのアカギレの薬を買つて、四国の方から近江の方まで一人で抜けて帰つて、然しお母さんから叱られて、何のために帰つて来たかと叱られて、この薬だけは、アカギレ薬だけはどうぞお納め下さい、といつて、置いてまた泣きながら御祖父さんのところへ帰つて行くといふところから始つて、熊沢蕃山が会ひに来られた所なんか、種々面白く書かれてありまして、あの小説を読みました頃は、あの中江藤樹先生のやうになりたいと、親孝行者になりたいと思つたのであります。ところが、今さき申し上げましたやうに、もう十八歳の頃から段々駄目になりまして、もう結婚前になると、すつかり、親不孝、親に段々勝手なことを云つて、親に散々心配させるといふやうな事になつたのであります。

そして私が広島に参りまして何年か経ちました頃、始めて藤樹先生全集といふ五冊ものの立派な御本が出来まして中江藤樹先生のことを種々解るやうになりました。

その時になりまして、全集のあちこち多少読んで見ましたが、中江藤樹先生が段々偉い方であるといふことが解りますと同時に、私といふものが、始め藤樹先生の様になり

つく／＼感じますのであります。

さうでありますからして、これは矢つ張り、この年と共に、親はあの時からであつた。それなのに自分はその親の年、と申しますのは、今年が私の父が死んだ年に私が当りますのであります。父が数へ年の六十八歳で死に、私も今数へ年六十八なのでありますからして、さういふところから考へましても、父があの時的心态はかうであつたらう、母の方が前に死にましたから、母亡きのちの父の心持と云ふものはかうであつたらうかといふことが此頃すこし解るやうな心持になります。

さうなつて参りますといふと、母のなくなつた後の父の心持といふものを、微塵も本當に慰めて居なかつたといふことが解つて参りますし、これはもう何とも云へない親不孝をしようと思つたことではないけれども、實際は親不孝になつて、親の心が解らなかつた。親の淋しい有様も解らなかつた、何とも云へない不自由な有様は解らなかつた。と云ふのは、その時は矢張り親孝行でもする積りであつたと申しますのは、母が死にますと直ぐに私の家内を父の居ります熊本へやつて、父の世話をして貰つたのであります。それを外面から見ると一寸親孝行に見えるのであります。ところがその心の中は言語道断でありまして、その時、何か母の死んだ後であります。父に手紙を書いた、その手紙の文句が、一つ一つ父親の心に障つたのであります。私

たいと思つてゐたものが、まるで駄目である。その反対の道歩んで来てゐるといふやうなことに気がついて参りまして、それから親が死んで拾年も経ちますと、それから親といふものが初めて解り始める。

四十三歳、その頃から親といふものが、その頃は親は死んで了うて居ります。その頃から親といふものがそろ／＼解り始めて来たのであります。解り初めて参りますと、あの時、あのやうなことも親不孝ぢやないと思つてゐたが、これも親不孝ぢや、あれも親不孝ぢやといふやうなことが段々自分の身につまされて種々なことが思ひ出でられて参ります。

さうでありますから段々年とつて参りますといふと、自分は矢張り、あらゆる方面で親不孝のかたまりであるといふやうなことが段々このはつきりとなつて参りました。少年時代とまるで反対であります。

かう申し上げると、そんなに親不孝ぢやと思ふことが親孝行ぢやとほめて下さる方があるかも知れませんが、さうではありません。ほんたうの親不孝ものであります。親に対して済まぬことを、幾つもの／＼やつてゐるのであります。それは口で云ふ問題ぢやなくて、實際私が踏んで参りました全体が、種々細かな問題に渡つて親不孝をしようと思つてゐたのぢやありませんが、今から振り返つてみますと、細かな点まで親不孝になつてゐるといふことをこの頃

の家内が行つてゐたのであります。私の父が手紙を開いて、朱筆をそばに置いて、是処がけしからん、此所が悪いと云つて、朱の点を打つたのであります。それを持つて居ります、持つては居りますけれども、それを開いて見る勇氣がないのであります。

これは親から云はれて、どうもその、そんなにして、親を苦しめたのか、それでゐて自分は、自分の家内を父のところへやつて、一角、實は親孝行の積りで居る、實は父親はひどく腹を立てて、そしてけしからんと朱の点を打たせてゐた、かうなつて居ります。

實際今日まで、その父の手紙を持つて居りますけれども開いて読んで居りません。堪らんであります。そんなことでありまして、どうもその親孝行の積りでやつてゐて、實はその親不孝をしてゐたのであります。

それにくらべますと、私の直ぐ次の弟は非常に素直な子供であります。親に対して非常に悪い手紙を出して居ります。私の手紙はこれはけしからんと朱の点をうたせてゐましたので、弟なんかにくらべましても私といふものが、どんなに親不孝だつたのか。それも親不孝をしようと思つたのぢやありません、親孝行する積りでゐて、親不孝をしてゐる。これは私の實際の歩みでありました。

かういふことになるのであります。實際この五悪段そのものであります。さうでありますから釈尊がさういふ親

不孝な奴は駄目だと叱りつけておしまひになるといふことになりますと、私は立つ瀬がなくなるのであります。が、積尊はさう云つた親不孝の私といふものの底の底まで見徹して、お前は親孝行といふものが微塵も出来る男ぢやない、それなのに、お前は若い時に、一角親孝行をする積りでゐたのか、それは憐れである、それは可哀想であ

◎ 白 道 の 旅 人

柳 瀬 留 治

花田さんから白道の旅人といふ題でとのことですが恐らく、善導大師の二河の白道から、信の歩みを話せとのころと存じます。

お互に心から燃え立つ焔に悩まされ、狂ひ立つ怒濤に呑まれんとし、行手が絶望に陥るのです。そこに『一心正念に直ちに來たれ』の喚び声に、かすか乍ら、この白道を辿らせて頂いてゐる次第です。

芭蕉が奥の細道に言つてゐる様に、人生は誠に旅です。然も苦難の旅で、涙のない旅で、我々は旅で死ぬ運命の者です。ただ念仏の白道を辿らせて頂いて居ること、それ一つにより、たとへ野に果てようと、山に骸を晒し終る運命

る、到底お前は親孝行といふものが出来る人ぢやないといつて、涙をもつて積尊が云つて下さる。さう云ふ積尊の御心持が、この五悪段にハッキリと感ぜられるのであります。さういふことでありまして、實際この私といふものが、親孝行しよう／＼と思ひながら、親不孝の歩みを続けて参つて居りますといふやうなことになります。

に至らうと、その心中を見て取り、涙を以て迎ひ取つて下される私が後について来て下され、骨を捨ててやらうとの、深いお心一つによつて、この涯のない旅に、疲れた足に励ましを与へられて歩んで居る次第です。

私は北陸を廻つて病臥の人や御老人を訪ねて参りましたが、御病人も御老人も等しく人生の旅だと思ふのです。『人は旅にして死す』と芭蕉の申す様に、生れ落ちてより歩くより仕方のない旅で目的地に着いたと思へば又、歩み出さなくてはならぬのが人生の旅です。何とかして思ひ乍ら途上で果てるといふ人が多い様に思はれます。

私のお訪ねして来た一人の御老人は、四十年來の信仰の同朋で、八十五歳になつた橋地さんといふ方で、亡き常観

先生と同年です。

橋地さんは日露の役で小隊長として陣頭指揮中に頭部の貫通銃創で倒れられ、從卒により病院に担ぎ込まれたが、既に瞳孔が開いてをり、軍医よりも駄目だといつて骨壺を渡された。所が從卒が泣いて懇願し、日夜の看護をしたことにより、不可思議にも助かつた方です。

そして陣中部下と誓つた言葉を守り、不思議に助つた上は癆兵を慰める事業の一助として戦友と餅屋を始められた然し役人の商法で、愈々左前になると、同志は去り、独りで重荷を負つて、家庭まで犠牲の破目に陥り、苦悶に陥られたそこで、宿縁といふものは有難いものです。仏教の盛んな加賀の生れで、ふと仏教によつてと考へられた様です。

そこで浩々洞の木場了本師かを訪ねられると『近角常観先生の所へ行つて聞く様に』と教へられ、求道会館を訪ねられた。学舎に行つて刺を通じると、常観先生自ら玄關に飛び出して来て、不自由の姿を見て

『どうされましたか。』

『そりやお気の毒に……さあ』

と手をさし延べて玄關へ引揚げられた由です。

その時、端的に、この方こそ自分の身心共に救つて下さる方だと思つたとの事です。

先生は橋地さん(のん)をうした運命に陥り、重荷を背負つて孤独になり、仕て見ようのない者を憐れに思召すのが誓願

不思議の念仏だと懇々と申された。

そこで橋地さんは、この仕て見ようの無い者に何と不思議なお慈悲のまします事かと驚き、且つ喜ばれたのです。その後は日曜毎に跛を曳き乍ら求道会館へ先生の講話を聞きに來られ、眼を曇らせ乍ら、如何にも嬉しさうに聴き惚れていられるのです。又何かの時には必ず見えるのでした。誠に妙好人ともいふべき方ですが、今度の大戦中、加賀の松任に疎開され、最近、室内で転倒ばれて、常臥の身となつて居られるのです。私の行くのが待ちきれず、朝から三度も人を駈に迎へ出したとのことでした。

二、

橋地さんと私の久方振りの話は、(念)の喜びの外はありません。感涙に咽び乍らの泣き語りです。久々に逢つたことも、又互に生きてゐたことも、全く念仏に尽きるのです。

橋地さんの言はれるに

『先達ある信者の君が来て、貴方は不自由で毎目かうして臥して許り居られて、嘸屈でせう、といふのだ。念仏に生きてゐて君、退屈どころじやないよ。こうした不自由で仕て見ようのない私の宿業を憐れに思召して下さる極りもないお慈悲がまします。動けなければ動けぬだけ、仕様がなければそれだけ、有難く嬉しく、お慈悲の底を味へば味ふ丈、限りなく深いので、退屈所ぢやないんだよ』

と仰言のです。私も同様『かかる業を持ちける身を憐れに思召す』の一語に泣けてくるのです。

話は最近深い感動を受けた信仰上のニュースに移りました。それは年始に参り、近角真観様から言はれたことです。其時、私の元旦詠の短冊を二枚、年初の詞としてお上げしたのです。

一つは

「年祝ぎに何は申さむ念仏に生る喜び祝言にせむ」

で、もう一枚は

「御父も叔父君も一世生の緒とさしし念仏つがせ子の君」

といった歌で、真観様に贈ると書いた様に覚えて居ます先づ私は

「あなたが東京に御転任になつたことを大変嬉しく力強く思ひます。この上は時々信者達に信仰のお話をして頂きたい」

旨を申した。真観様は

「よく信者が来て、そうしたことをいふ。君もその淋しがりやの口であらう。この念仏に救はれて安心した上に、淋しいなどと云ふことは、あるべき筈のことでない。甘えて居るのであらう。

叔父常音はやさしくて、親切で、いはば慈母であつた。

父常観は嚴父の立場でガンと槌で頭を打つ、烈しい信仰の面を持つてゐた。……。

と、今に命を取られるんだがなあ——、と云つた。叔父は誠に人間の身を以つて仏を行じた。果せる哉、父の言つた通り、命を取られた。

君達は叔父常音の骨までしやぶり、とう／＼殺してしまつたのだ。猶ほその上に、俺を引張り出して殺さうと云ふのか。俺は飽く迄僧ではない。在家で、世俗にあつて信を伝へて行く。

叔父が云つたことがあるクわしは一生無職で兄貴に寄食して過してしまつた。真観、お前は一つの定職で生活を立ててくれ々と。そして私の就職の決つた時、どんなにか喜んでくれた。

親鸞聖人の信仰は元々在家の念仏にあるのだ。俺は今俗世間にあり、炭坑内の命朝露の危きにある者に交り、折に触れ、この念仏を語つて居るのだ。今後もそれで行く。俗な俺などは、跡を継ぐ継がぬは問題でない。大願業力の仏がまします。親鸞聖人は敵として在す。近角常観、常音の身は死せりと雖も、幽冥界にあり、偉大なる力が我等の上に輝いてゐる。俺なぞ出ようが出来ないが、不滅の偉大な力の上に寸分の増減はない、近角の云つた絶対他力の念仏がびくともするものでない。

近角常観の獅子吼した、仏の喚び声に一念の信を持つた上は、水火の難を厭はず、ただ念仏一つで独り歩きで行けるのである。それに独り歩きが淋しいの、何のといふのは

あのやさしく親切な近角常音、あんな人は、人間として

この世に恐らく又とない人である。何千萬といふ人間の中に、又何十年、何百年の間に、又とない人だ。悩める者のため親身になり、生活を省みず、その身が生きてゐる人間たることを省みず、全く何時、如何なる時と雖も、諸君の心中の悩みを聞きとり、如何なる愚痴醜悪をも受入れて、夜の更けるのも厭はず、心から相談に乗つてくれた。そんな人は何処にあるであらう。全く人間の為し得べからざることを一生の間為し続けた。これは仏でなければなし得ることでない。そのため叔父はあの様に体を毀し、あの様な病氣になつて死んだ。叔父を殺したのは君達であらう」

と大喝されるのである。誠に／＼その通りである。私は信仰に至るまで、恐らく七年間、毎晩の様に、夜の三時、四時頃まで先生を煩はせた。信後数年たつた時、一方ならぬ過去のお礼を申した所、

「そうだつたなあ。夜中話した末、どうも私にはわかりませんと君の云つた時、全くガツカリしたよ」

と申された、それは恐らく、何十人、何百人の人に対してのことであるから、たまつたものではない。そうしたしぶとい我々に呆れないでお導き下された御一生であつた。

真観さんの話は更に常観先生の言に及んだ。

「父常観はよく云つた。常音はあんなに誰も彼もに身を打ち込んで、身上相談まで、自ら背負つて、あゝ苦勞する

甘えて居るのだ。人生はそんな生やさしいものではない。淋しい、苦しい、悩ましい、当り前だ。その為の念仏なんだ。君達は求道会館をクラブにし、慰め合ふ所にせよといふのであらう。俺はそうした者共を怒喝し、目を覚まさす神將となつて、追払つてやるであらう」

といふ意味な、いはば年頭の言志であつた。ウイスキーを飲み乍らの話で、荒つぽく烈しい語気であるが、それ丈に忌憚のない心中を聞き、甚だ有難く力強い限りであつた。このことを橋地翁に申すと、話す私も、聞く橋地さんも半ばは咽び、「そうだ、そのとうりだ。そんなこと仰言つたか、真観さん有難いな」と、涙を啜り乍ら感動し「真観さんの言々誠に生きた念仏だ」と喜ばれるのでした。

さつき病床からやつこのことと抱き起した橋地さんは、蘇つたかの如く、念仏の喜びで一杯で、病軀を忘れ、顔面赫灼たる輝きを見せ、昔にかへる若々しきを見るのでした。橋地さんはあの体で、八十五歳まで生き、且つこの様子であるといふことは全く偉大な仏力によるものです。聖人の現世利益和讃に示される様に、念仏によつて、凡ての業繫も、人生苦も、病苦も、洗ひ去られて、拔苦せられた為だと思ふのです。定業中天が免れ、息災延命を実証する一人の様に思はれます。然しこれは念仏自然の然らしむるもので、これを願ふ功利手段から出発する新興宗教とは全く反対な、思ひもよらぬ賜物であります。

失明を縁として

長島愛生園 毎川 敏 男

今朝も眼をさますと、テニスコートからボールの音が聞えて来る。入園者がテニスをやつてゐるのだらうか、いや恐らく看護婦さんと患者がやつてゐるのだらうと思ふと、そのボールの音が、療養所の明るさを表現してゐる様に、又私を励ますかの様に聞えて来る。

私はその音に飛び起きて、杖を頼りにしばらく海岸を散歩した。気持のいい朝だ。私の過去の生活、現在の生活が次から次へと浮んで来る。……爽やかな朝、ささやかな私の体験の一端を述べさせて頂かうと思ひ点筆（盲人の点字を綴る筆）を取る事にしました。

私の家は父母、祖父、私と四人家族で、昭和二十三年までは平穩な生活が続けて居たが、二十四年に、私が突然一瞬にして両眼を失ひ、同年五月母親を亡くし、翌年祖父が他界し、不幸が重なり、家中は灯の消えた如く暗黒となり、私はこの時ほど孤独感を覚え、人生の無常を痛切に感じたことはありませんでした。

二十歳の若さで全くの盲目となり、人生のどん底に陥つ

は出来ませんでした。

時には行をするのが苦しい余りに、自分には一心に信仰しても御利益が頂けないのであらうかといふ様な、お薬師様を怨む様な恐ろしい心さへ起きて来ました。

その時、信者の云はれるには、信心が浅いから御蔭がないと云はれる。然し私にはもうそれ以上の自力修行と信仰は出来なくなつてしまひました。然しその時の信仰は、目を治して下さいといふ欲あなたのみ事をするだけで外にもありませんでした。

そうしてゐるうちに、結局、身体を無理して、目は快くならず、身体まで衰弱して了ひました。そして苦悶の余り阿弥陀様に脊中をむけて迷つて居る私を毎日見護つてゐて下さつた父親の心中は、私以上にどんなにか苦しかつた事であつたであらうかと、今になつて、初めて父親の温かな氣持が察せられ、我身の苦しさの余り、父親の心中など察する余裕はなかつたのを、本当に申しわけなく思ひます。

然し、僅かながらもそうした自力の修行をさせて頂いた事も、今の私には無駄な事ではなかつた。短い期間でも苦しい行をした事に依つて、親鸞聖人の御苦勞を偲ばせて頂き、阿弥陀仏に救済される事がどんなに有難く尊いことか、又阿弥陀仏の御慈悲が如何に広大であるかといふ事に氣付かせて頂く御縁となりました。

た私は、青春の希望も何処へやら。それからといふものは肉体的にも精神的にも、苦しみに苦しみを重ねて、世を怨み人を憎み、時には御仏様さへも怨んだのであります。

私は幼時から父母から口癖の様に阿弥陀仏の御話を聞かされながら育てられました。然し吾身の苦しいばかりに父親の言ふことも耳に入らず、阿弥陀仏に背を向けて、病氣をなほしたい一杯からお薬師様を信仰する氣持になりました。そのお話を聞けば『お百度を踏んだり、歩いてお参りしなければ、御利益がない』と云ふことであります。成程、目を治して貰ふには、それ位の修行をしなければなるまいと思ひ、家からお薬師様まで四十里もある長い道を暑い時、歩いてお参りいたしました。そしてお百度も踏んだはだして御堂の廻りを百回まはるのです。或る時は雪が降つて、その雪がかたまり氷の様に堅くなつてゐる上をはだして廻り、そのため、足裏に傷が出来たこともありす。又御真言を一千遍、一万遍と数へて一心不乱に称へるのです。然し一心に称へなければならぬと思へば思ふ程、雑念が湧いてきて、私にはその雑念をどうしても押へざる事

そうした苦惱の生活が続けてのち、遂に思ひきつて、唯一人の父と別れて、二十六年二月に長島の愛生園に入園しました。入園して医師の先生、看護婦さんの御親切の深さや、病友の親切さに胸打たれて、想像以上に明るい所でした。その入園当時の感謝の氣持を何時までも持ち続けたいものです。余りにも恩恵を被り、その療養生活が長くなるにつれて「手ですること足でする」やうに御恩になれて忘れ勝た私の心の浅薄さに恥ぢ入るばかりです。

盲目となつて入園した為に、野外を一人歩きする事も出来ず、唯ベッドの上で、将来の事を案じてみたり、何一つ見ることの出来ぬ眼の中に、故郷や肉親を思ひ浮べて淋しい生活を送つて居りました時、熱心な仏教信者が慰問して下さい、真宗の教をくはしく話して下さい、真摯な私の心の中に光明となり、偉大なお力となつて下さつたのは、全く不可思議なるみ仏様の御廻向でありました。

それからは、仏法の話が聞きたくてなりません。それ以後は何時までも人を頼りにしてはならぬと痛感し、お参りだけでも一人で行き度いと思ひ、杖をもつて歩行の練習を始めました。にはか言の悲しさに、生れて初めて杖を頼りにして歩かうとする私にとつては、言ふに云はれぬ恐しさ苦勞がありました。然し、御仏様は『見て居て下さる、守つて居て下さる』事を信じ、杖の進むにまかせて一生懸

命に練習いたしました。こうした努力の甲斐があつて現在では園内を自由に歩く事が出来、こんな嬉しいことはありません。杖は私達盲人の命です、杖を折つた時、初めて杖の恩を感じます。

杖を頼りに集会所に行き、仏法を聴聞させて頂くといふ事は云ひ知れぬ喜びであります。然しあまりにも煩惱の熾盛な私は、法話を聞かせて頂いてゐる時は成程と思ひ、有難いなあとと思ひ、時には非常に感激して胸一杯になり涙があふれることもあります。然し御法縁が遠のくと喜びも薄れて行きます。こんな罪業の深い私でありますから、氷載永劫の間の御苦勞下された御本願と聞かせて頂き、自己の浅間しさを懺悔せずには居られません。

斯うした生活にありまして、親鸞聖人の御和讃

『如来大悲の恩徳は 身を粉にしても報ずべし

知主知識の恩徳も骨を砕きても謝すべし』

を繰り返して誦読させて頂いて居りますうち、フト氣付きましたのが『盲目の病者の方に、点字の仏教がとどき、心の眼を開いて頂ける御縁が出来たら……』と思ひつき、早速二十八年の十月から点字の練習を始めました。すると又不思議にも奈良や鳥根の信仰の深い点字奉仕者の方と御縁を結ばせて頂き、有難いことであります。

惟ふに、見える肉眼を頼りにして自己を満足させ、幸福

であると思つてゐた過去の自分の生活を省ると、目の見えてゐたことが私にとつて真の幸福ではなかつた事を、今盲目になつて初めて知らされると共に、み仏のお慈悲に逢はせて頂き、盲目の世界にも真の幸福のある事に気づかせて頂きました。この様にすこしでも自己の姿に気付かせて貰ふことの出来るといふ事は、ひとへに本願の御力の賜物であります。失明し、難治の病氣になりました大きな苦惱が縁となり、尊い佛法の世界に開眼して頂けたことを何よりの慶びといたして居ります。

私達病者は、二重苦の中にあつて、この大きな宿業から逃れることは出来ません。この大きな宿業を背負つたまま苦しみのままを、如来様の光明の中に撰取され、救済されて行けるとは、何といふ有難いことでありませうか。

愛生園内にも二台のテレビが設置されて居ります。私も盲目といへども、テレビを見たいと願ふ心が起つて参ります。然しテレビを見る一時的の楽しみではなく、テレビに写る如く自己の心の姿をあり／＼と見せて頂くことの出来る、如来様の光明に照護せられてゐる自分を本当に幸福者と思ひます。南無阿弥陀仏、々々々々。

最後に『仏法ひろまれ、世の中安穩なれ』と念じつつ、盲人、難病者の立場から私の体験の一端を述べさせて頂く事の出来ました事を感謝して点筆をとどめます。

註。本稿、筆者仮名。

可説居士法信抄

聚墨生

三二、二、二十二日。

……近年に無い大雪の年とのこと、寒い／＼と愚痴を言つて居る中に早春となりました。御蔭にて今年は風邪一つひかず、足袋を一度もはかずに通しました。

さて、慈光誌が待ち遠しく、係の役人が来ると、言はれぬさきに『慈光でせう』と問う程、十五日が過ぎると今日は／＼と待つて居ります。今日も御本典を書写させて頂いてゐたところでしたが、一旦筆をおき早速拜読。何時も／＼真実を通して呼びかけて下さる実語を静かに聞かせて頂く時、この愚身にほの／＼と言ひ知れぬ暖かさが感じられるのです。

本月号で「汝若し念ずる事能はずんば」の聖句、私も久しく尊いことと味つて居りました折とて、一層深く感銘をうけました。

「若し念ずること能はずんば」このまゝが私への呼びかけ

と頂きます。私自身刑が、確定されながらあきらめも出来ず、いや念仏さへ忘れ勝の私。放逸と無慚の日暮しばかりの時、慈光誌によって、その私への呼びかけよと、気づかせて頂きます。

又福島先生の御法話を通じて、近角先生の懺悔録を読ませて頂きました。その鏡によって私の姿が照し出されますので私の事を書かせて頂きます。

先生の御承知の様に、私は昨年剃髮式を受け、その時K君と一緒にした。この人は今月二月八日に往かれ、私の法友としてはこの人一人でしたのに。

然し私はこの人とは神が悪いと言はれる程の間でした、それも私の小心からであります。近角先生の申される様に「自分が親切に種々と何かと言つてやるのに、他人は何故あのやうに悪くするのだらう……。」と私自身常に思ひ悩んで居りました。

又近角先生の言葉に「この様に初の間は人を善くしようとしたのが、終に自分が悪くなつてしまつた」と。これはそつくり私の嘘のない告白です。指導課長さんからも「お前は人のことで悪くなる」とまで言はれたこともありません。

又近角先生は「それでも自分では世の中のものどもは、如何にも不真面目である、自分は真面目である……」と告白されてありますが、これも私の心中をそつくり言ひあてられてあります。

K君が何時も私の真似ばかりして居る様に見え、且つ聞えて面白くないこととばかり思ひましたが、今近角先生の教でよく反省いたしますと、K君のそのままが私であつたと知らされるので、なつかしくなり、この身の知識であつたと思はれるばかりです。

何分無学の身で思ふこと感じたことも充分書けないで残念ですが、先達や、知識の方が私のことをぞのまゝ言つて下さるので、有難いことです。今日までは人が自分の真似をすると言つて怒つた私が、今先達知識の真似をして日暮をして居ることを思ふと、何と言ふことを思つたのかと恥しく思ふのです。……。

三一、三、二十四日。

御縁を頂いで早一年となりました。……行き詰つた人生

なづく。大小の聖人、重軽の悪人、皆同じくひとしく、選扱の大宝海に帰して念仏成仏すべし』

と、ただ他力廻向の念仏によるべきをひとすぢにお勧め下さいませ。

『しかれば、大悲の願船に乗じて光明の広海に浮かびぬれば、至徳の風静かにして衆禍の波転ず、則ち無明の闇を破し、すみやかに無量光明土に到りて大般涅槃を超証し、普賢の徳に遵ふなり』

と、南無阿弥陀仏の本願力のおすくひをお聞かせ頂く時、私如き者を、この罪業深重の私を味はせて頂く時、煩惱熾盛の日暮しの中にも、かすかな微笑と温いみ恵みを身に感じます。

この憂き世に、今罪の身ながら、經典と教導を頂けることは何たる有難いことでせう。それであるのに愚痴とむさぼりと怒りの煩惱が、時には念仏も申せずなり、時には一入の喜びと有難さにむせぶこともありませう。それにしても、しみんと横川法語『……妄念はもとより凡夫の地体なり、妄念のほかに別に心は無きなり。臨終の時まで一向妄念の凡夫にてあるべきぞと心得て……妄念のうちより申し出したる念仏は濁にしまぬ蓮のごとくにて決定往生疑あるべからず』を思ひ出して南無阿弥陀仏と喜こばせて頂いて居ます。

又聖人の常の仰せ『親鸞一人がためなりけり』と『よろ

に、その行き詰つた方より手をさし延べられて、今日御念仏の御縁を頂きましたことは、ひとへに如来聖人のお蔭と喜ばせて頂いて居ります……。

三一、四、二十六日。

……。自在丸先生より御丁寧な御法信を頂き、南無阿弥陀仏の御教化と共に、温い御言葉を賜りました。私はこれ以上の悪い者はあるまいと自分で感じる程の罪造りでありながら、皆様から色々心配を頂けることを思ふと恥しく、恐ろしく、たゞめぐみを謝すばかりです。

三一、八、二日。

……。近頃「かくて心眼は開けぬ」の推葉禎子様の著書を求めて拝読して居ります。誠に信心の御同行の一言一句は、そのまゝ、仏語金口の如く渴仰させられます。

三一、一〇、一二日。

合掌……御本典を書写し、御教を頂いて居ります。

『他力とは如来の本願力なり』

と云はれ、又

『大行とは無碍光如来の名を称するなり』

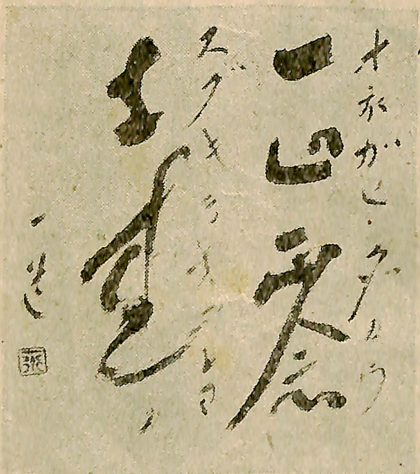
と仰せられ

『これ凡聖自力の行に非ず。かゝるが故に不廻向の行と

づのこと、そらことたわごとまことあることなきに、ただ念仏のみぞまことにしておはします』の仰せも、我身に頂いて一日一日を送り迎へて居ります。

三一、一〇、二二日。

今、目の前にある他山先生の色紙を口誦して、如来招喚の勅命をきかせて頂いて居ります。……。合掌



三一、一一、一〇日

……。足利先生著『光輪』の御法施有り難う御座いました。ことに広島の新藤正雄先生が、御母様の五十年忌の御施本とのこと、私には泣けて／＼仕方がありません。……。

三二、二二〇日。

合掌。十九日慈光十二月号を拝受致しました。

私は今、怒り虫、乱暴者の見本の立場、実際に十七日に或る小事より怒り、葉鏝をけりつけた程の者です。久しく役人や多くの人に何かと世話になつて居る身でありながら何といふ事をするのだらうか、人ではなくこの私がです。

面目ありません。この怒りのかたまり、火の玉の様な私、この拘留所中で一番の乱暴者、何かにつけて「カーッ」となつて了う。自分ではおさへよう／＼とすれど腹の底からこみ上げる怒りはどうすることも出来ないのです。こんな身で他人のことを裁くなどの出来る身でない知りながらこの怒り腹立ちの心がこの身のはてる日までつきまといふのかと思ふと悲しくなります。この怒り虫、乱暴者のままで死にたくないと常に思ひ注意すれどもどうにもこみあげる怒りはとめることが出来ません。丁度今も今とて種々と反省して居りますところに慈光を頂き、「親様の手識りの着心地」の近角先生の御講話を拝読し、自己の弱さをますます見せつけられ、それに如来大悲の御教を泣き／＼読みました。ここを繰り返し／＼読んで居ります。

私の不信心を聞き、高慢を見せられつゝ、よくなつて、よく思はれて死にたいなどは、無理なこと、思ひ上つた事だと思はずには居られない。これが自力我慢の心、雑行

雑修の心と知らされます。南無阿弥陀仏。

犯則をし、葉鏝をけるまでの事態を書き出さうとして書きました。この近角先生の御教を読んで居るうちに、自分の弁解しようなどと思ふ気持ちの醜さを感じ、とりやめました。その方が自分でも気が持がよく感じて参りました。

三二、二二一日。

……京都の佐々木徹真先生始め足利浄円先生より御法信を頂き、その上、足利先生より自照誌、佐々木先生より、人生に思ふ、の書を賜り、身にあまる御蔭を謝し……。

三二、二二二日。

……御蔭様で、煩惱のはげしさにまどふごとくに、如来の御催促と感味せられて南無阿弥陀仏と頂くばかりです。

……今月一日に、囚友は執行せられました。それに付けても「後生の一大事」に心がくべきなのに、私には他人事としか感ぜられぬ、鈍な愚か者です。このずぶとい私をお導き上さる諸知識の御苦勞ははかり知れぬのに、その御礼さへも忘れ、南無阿弥陀仏の御催促によつて何かと御恩を思ひ出されます。

合掌。

三二、二二七日。

南無阿弥陀仏。

……三月二十七日午後二時頃、広島の斎藤先生が御面会して下さいました。先日は佐々木先生も来所下さり、足利先生よりの色紙、又最近は仏画を送つて下さりました。

朝夕、机の前に掲げて、光顔巍巍たる尊顔の中に、ほのぼのと微笑みかけて下さる如来の大悲心に、ただほれ／＼と念仏させて頂いて居ります。

こうして、日毎、夜毎、仏に照護せられ、寝るも、起きるも、臥すも坐るも、この三畳の独房の中で、南無の一心に、一念に、包摂せられて、如来大悲の法水に、この泥凡夫の身をつけて置かせて頂けることこそ、五却永却の御念力の御蔭であります。この泥凡夫が、罪悪生死の凡夫が、この逆悪不善の私が、私が仏になれるとは何といふ願力の不思議でせうか。……。

二俣。

あと二日で四月一日。長女が一年に入学致します。今こうして長男と長女の入学の模様を生きて知ることが出来たことは慶びで一杯です。この子の一生の記念になる品を多種々思ひましたが、先に福田先生から仏像を贈つて頂いて居りますので念珠を送ることに致しました。

只今、慈光を頂きました。先生の「一大事といふこと」神原先生の「耳と目」先月号に続き味い深く拝読、愚痴無目の徒であるところの私の為によき教誨となりました。

又「わが人生を憶ふ」の松村先生の信味豊かなものを頂きました……。その最後の章に「愛慾の情は涯りなく、いかになつかしくおもってもやがては別れて行く身の淋しさというものは制へやうもないのだが、然し明日の手術台が絞首台であつたとしても、この慶びを以て死んで行くことの出来る私にして下さつた仏恩の不思議さ……」の言葉を通して、阿弥陀如来が私の為に仰せられる言葉であり、如来招喚の勅命「そのまゝ来いよ」との喚び声として深く感佩させられます。

最後の命の終るその時、一瞬の間にも、南無阿弥陀仏に育くまれ、撰取せられ、護念証誠せられて往生成仏せしめて下さるみ教を聞かせて頂けます御恩を謝しまつります。何卒先生御身大切に、又の日に。

可説より。

註。四月廿六日午前十時、遂にやすらかに往生。

明日の夜は照りますものと知りながら入るさの月の惜しくもある哉

南無阿弥陀仏。

三二、二二四、二二〇日。

読人不

編集後記

本号で第百号になり、皆様方の玉稿も沢山頂き、増頁いたしました。がなほ余り、百巻、百式号までに、順次記載させていただきます。

ことに、死刑囚、可説居士の法信抄と、癩疾盲目の毎川さんの、死と病に直面されての無碍光の信味を頂けましたことは、全く感慨無量であります。

西岸上に人有りて喚んで曰く
『汝一心正念にして直ちに來れ我能く汝を護らんすべて水火の難に墮することを畏れされ』

を信証して下さつて、私共に、無量無辺の方便引入の德音を下さいました。

△大経五悪段講話の福島先生の御講話を通して、孝養父母、奉仕師長、慈心不殺、等々を浄土の因とされずして、ただ念仏の大悲を選びに択んで下さつた仏智のまことを御身にかけて御知らせ下さいました。先生は御病氣入院中の御次男様を降るにも照るにも、毎日見舞うて居られます。

△白道の旅人は、本年正月、柳瀬様が

近角真観さんを訪ねられ、次いで金沢の無二の信友、福地翁を見舞はれ、更に滋賀の病人を訪はれて、拙庵に第一日曜に御来訪下さいました。その節御感話をして下さり、原稿にその一片を書いて下さいました。この次の話もやがて頂けることでもあります。

△失明を縁として、毎川さんの体験録は、突然失明といふ型で癩疾に犯され血の滲む苦闘の末に、信眼がひらけ、その慶びのあまり、只今は点字奉仕と音楽に精進して居られます。

△可説居士法信抄は、昭和卅一年と卅二年四月二十日までの法信から抄出しました。次号には居士が百号記念のために遺してくれた原稿を戴せ、三疊の独房に鉄鎖につながらぬがらの最後の声を頂きませう。

△百号刊行に際しては、この八年余の私自身への反省と、其間に教へられたことの落穂拾ひであります。失ふもの悲しみと、失ふことを縁として、いよく深く広い、仏徳を感佩させて頂くことは、転悪成善、衆禍被転の恩恵であります。 願力自然

聚墨生

御案内
時、七月三十一日夜六時半：九時。
所、名古屋市中区新栄町五丁目
二五番地。宗円寺。
市電。東新町と新栄町の間。五
十米新道の交又点西北角。
題、超世の願
人、文傳 白井成允先生

急告
慈光誌は續いて刊行いたしますが、私の持病(冠狀動脈機能不全)のため七月と八月は講話を全部休ませて頂きます。従つて、日曜講話も休みます。悪しからず御諒承下さい。
敬白 花田正夫

定価 一部 十七円(送共)
半年 百円(送共)
一年 二百円(送共)
名古屋市南区駈上町二ノ二八
編集・発行人 花田正夫
印刷人 本田政雄
名古屋市南区駈上町二ノ二八
發行所 慈光社
振替口座名古屋一〇四七〇番

慈光 第九卷第六号昭和三十三年七月十五日発行(毎月一回十五日発行)
昭和二十四年七月二十三日 第三種郵便物認可